語型対応から見た擬音語の語基

中嶌容子

一

前稿①では、擬音語擬態語の語としての音象徴性を認めるべき語幹は、語型と語基とからなるユニットと捉えられることを確認し、また、語基が或る語型と組み合わさった時、語としての意味をなすような語形となっている、いわば「語基の語型への対応」の仕方によって、語基の音象徴性の強さが異なることを論じた。そして、ABッ・ABン・ABリ・ABAB（ABは二音節の語基）の語型を、語基に強調音を加える付加型語型（Ⅰ型）、AッBン・AンBリの語型を、語基を破壊する位置に強調音を加える破壊型語型（Ⅱ型）として、どのタイプの語型に対応しているかによって語基を分類し、音象徴性の強弱を明らかにすることを試みた。

本稿では、二音節語基を有する擬音語を検討の対象とするが、いったん擬態語をも含め、擬音語擬態語という表現対象の枠付けと語型との関係を概観し、その上で、擬音語語基に絞って、語型対応のあり方と表現内容の傾向とについて検討していくことにする。

二

本稿での検討の対象となる語の収集に用いたのは次の辞典である。

『擬音語・擬態語辞典』（天沼　寧・編　東京堂出版　昭和四九）

―以下「天沼編辞典」と略称。引用は（天）と記す―

『擬音語・擬態語辞典』
（浅野鶴子・編　角川書店昭和五三）
―以下「浅野編辞典」と略称。引用は（浅）と記す―
『日本国語大辞典』
（日本大辞典刊行会・編　小学館　昭和四七～五一）
―以下「国語大辞典」と略称。引用は（日）と記す―

右の辞典に見出せる現代語の擬音語擬態語のうち、次の語型をとる語を収集の対象とした。

ABッ型　「がくっ」「どきっ」など
ABン型　「がちゃん」「くるん」など
ABリ型　「ばちゃり」「ひらり」など
ABAB型　「いらいら」「ぽこぽこ」など
AッBン型　「がったん」「ぽっちゃん」など
AッBリ型　「すっきり」「ぽっこり」など
AンBリ型　「こんもり」「にんまり」など

収集の基準は、次のア、イであり、そのいずれかに該当する語である。

ア　「天沼編辞典」もしくは「浅野編辞典」に掲載の、上記語型の語
イ　アの二音節語基を持ち、上記語型に対応させた語型が「国語大辞典」に掲載されている語

なお、ABAB型については、「おちおち」「ちょくちょく」などの程度副詞を除く一方、「しみじみ」等の語を加えている。

「ぐんぐん」「ぐーぐー」「ぐいぐい」などは、AンA・A－A－・AイAイ型の一音節語基の語と見做し検討の対象から外している。これらの語型は語末に「リ」音をとって「Aンリ」「A－リ」「Aイリ」の形になることがない。

また、「国語大辞典」から収集したのは、用例を明治以降の作品から採っている語・意味、或いは用例のない解説のみの語・意味である。用例がない場合も取り上げたのは、その語・意味が文章語としてでなく、日常語として一般に用いられていることの現われと判断したためである。

表1に、収集した擬音語擬態語の語数を掲げておく。擬音語数と擬態語数とを足した数が総語基数を上回っているが、これは擬音語でもあり、擬態語でもあるという場合があるからである。

まず、擬音語について語型ごとに整理してみると、擬音語の総語基数に占める割合は、AッBリ・AンBリ型で極端に少ないが、その他の語型では40～70％弱を占める。

擬音語数の割合は、ABン・AッBン型で高く、ABッ・ABリ・ABAB型では40％台でほぼ均等である。こ

の偏りに語型の音象徴上の理由を求めるなら、ABン・AッBン型の二つの語型に共通するのは語末の撥音である。

語末に撥音をもつ語型では、擬音語の占める割合が高いのに対して、語末に「リ」音を持つ語型、特に破壊型語型のAッBリ型には擬音語が非常に少ない。

尤もこれは理由のない事ではない。というのは、語末リ音の語型は、歴史的にABラ・ABロの語型に溯ることができるのである。

鉤を以ちて其の沈みし
　處を探れば、其の衣の
　中の甲に繋りて、可和
　羅と鳴りき。
　　（古事記・中）②

筑波嶺の岩も等杼呂尓
落つる水世にもたゆら
にわが思はなくに
　（万葉集　三三九二）③

こうした「カワラ」「トドロ」の「ラ」「ロ」と、

沖ゆくや赤羅小船に裹遣らばけだし人見て披き見むかも
　　（同　三八六八）

の「アカラ」の接尾語「ラ」とには、共に情態性の性格をもつ接辞的要素が認められる。こうしたことから、従来「カワラ」「トドロ」の「ラ」「ロ」も接辞的な造語成分と考えられている。④

また、山口佳紀氏が現代語の立場から、語末の「リ」音を「語基の情態的な意味を保ちながらこれに独立性を与える要素であろう」⑤と言われていることも参考にすべきであろう。このように「リ」音が接尾語であれば、それが音響を写すのに適さないのは一面において当然と言える。⑥

しかしながら、同じ語末に「リ」音をもつ語型であってもABリ型では擬音語の割合がさほど低いわけではない。それでは、ABリ型とAッBリ・AンBリ型との擬音語の割合に見られる差は何故生じるのであろうか。

付加型語型における二音節語基ABと、破壊型語基におけるABとではその性格に違いがある。AッBリ・AンBリ型では、語として成り立つために語基は語型に大きく依存している。つまり、ABリ型とAッBリ・AンBリ型とでは語基と語型との緊密さに違いがある。この点について

表1

	擬音語数		擬態語数		総語基数
ABッ	108	48.21%	222	99.11%	224
ABン	77	68.14	107	94.69	113
ABリ	89	43.41	196	95.61	205
ABAB	188	44.76	415	98.81	420
AッBン	7	53.85	12	92.31	13
AッBリ	3	2.61	115	100	115
AンBリ	1	3.85	26	100	26

は渡辺実氏も既に「語としての自己統一性」として説かれており、[7]確かに「ハキハキ答える」に対する「ハッキリ憶えている」のように、本稿でいう付加型語型・破壊型語型の両方に対応するⅢ型語基の場合、破壊型語型の語の方に内面的意味合いの深まりが認められる。

このように、AッBリ・AンBリ型の語、及びそれに対応する語基は音象徴性が低く、自ずから音響模写には適さないのである。

ところが、同じ破壊型語型でありながら、語末に撥音をもつAッBン型ではABン型に準じる形で擬音語の割合が高い。そうすると、本来的に強調音である語末撥音と、本来的には接尾語である語末リ音との性格の相違は、破壊型語型において付加型語型の場合よりも鮮明に現れるということであろう。こうした語型の性格の相違は、各々の語型に対応する語基の性格にも反映する。Ⅱ型語基がAッBン型には「ぞっこん」の一例しか認められないのも、このことと無関係ではあるまい。[8]

ところで、このような擬音語と語型とに見られる特色は、我々が外界の音響をどのように聞いているかを表していると考えられる。「がたん」「ずしん」「ぺったん」「ぽっちゃん」の如く、我々は外界に生じる一まとまりの音響の末音・余韻を撥音で聞きなす場合が多いということになる。[9]

擬音語については、音響を写す語であることから、右のように語型との関連を考えることができる。

次に、擬態語について見てみる。擬態語数が総語基数に占める割合には、これまで検討してきた語のような語型間の差が余り見られない。見られないというよりは、収集した語のほとんどに擬態語の要素が認められるといった方が正確である。

ところで、本稿で扱っているのは、辞典に掲載されている、一般的ともいえる擬音語擬態語である。擬音語数が総語基数の40～70％弱であるのに対し、擬態語数は90％以上を占める。つまり、擬音語の殆どが擬音語であると同時に擬態語でもあるわけである。一般に定着した擬音語の多くは、もはやその音の生じる状態とも密接な繋がりをもち、その両方を写すのである。恰もそうした状態と結びつくことによって擬音語が一般化するかの如くである。

三

さて、上述の通り、一般に定着した擬音語の殆どは擬態語でもある。だが、擬音語としての語意を併せもたない擬態語は、「けばけば」「とろり」「もやっ」など決して少な

くない。また、擬態語としての語意を併せもつ擬音語が、擬音語としての語意を後で獲得したとは考え難い。もともと音響を写す語がそれに付随する状態をも表すようになった、或いは共感覚[10]によって元来両方の意味を表していたと考える方が無理がない。つまり、擬音語としての語意は、その語本来の意味である。従って、擬音語と非擬音語とに分類することに差程無理はないと考えられる。

なお、本節では前節での結果を踏まえ、付加型語型（Ⅰ型語型）のＡＢッ・ＡＢン・ＡＢリ・ＡＢＡＢ型、及び破壊型語型（Ⅱ型語型）の中で擬音語の割合が高いＡッＢン型に対応する語基を検討の対象とする。

擬音語語基は、語型対応のあり方によって次の四種に分類する事ができる。

Ⅰ(a)　付加型一語型にのみ対応する語基
Ⅰ(b)　付加型の複数の語型に対応する語基
Ⅱ　ＡッＢン型にのみ対応する語基
Ⅲ　Ⅰ型Ⅱ型両方の語型に対応する語基

Ⅰ(a)は、ある特定の語型に依存する形でしか語として成り立ち得ず、その点複数の語型語尾音を強調音となし得るⅠ(b)とは明らかに性格を異にしている。

次に、表1に挙げた語基から、Ⅰ(a)・Ⅰ(b)・Ⅱ・Ⅲの語基を取り出し、それらの意味分類を調べることにする。

ところで、表1の語基数は語基の形態数を表すもので、意味によって認定した語基の数を表すものではない。つまり、同音異義の語基も、表1では同一語基として扱われている。意味の区分を考えるためには、同音異義の語基は別箇の語基として扱う必要がある。そこで、或る語基について、それが語となった時の複数の用例から同音異義の語基を選り分けてみる。

同音異義と見做した語基の一例として「クシャ」を挙げておく。

ＡＢッ型

（ア）がけから落ちた乗用車は、見る影もなくくしゃっとつぶれていた。（天）

（イ）…手先が器用なだけじゃなく、料理の手順もじょうず、とほめられ顔をくしゃっ。（天）

ＡＢン型

（ウ）さっきから、くしゃん、くしゃんと、くしゃみばかりしている。（天）

（エ）持ったものを引払はれて、飴の鳥はくしゃんと潰れる。『日本橋』〈泉鏡花〉（日）

ＡＢリ型

（オ）　がけ下に落ちたスポーツカーは、原形もとどめないほどくしゃりとつぶれていた。　（天）

ＡＢＡＢ型

（カ）　読み終った手紙をくしゃくしゃと丸めて屑かごにほうりこむ。　（浅）

（キ）　顔じゅうくしゃくしゃにして笑ってみせた。『ダス・ゲマイネ』〈太宰治〉（浅）

（ク）　こう雨ばかりだと気持ちまでくしゃくしゃする。　（浅）

（ケ）　おばあさんは口の中でくしゃくしゃと念仏を唱えて箸をとった。　（浅）

右の（ア）～（ケ）の内、ＡＢＡＢ型の（カ）（キ）は「整然とした状態が崩れる様子」（浅）を表しており、（カ）と（キ）とは意味転化の関係にあると推測できる。同じ事はＡＢッ型の（ア）と（イ）との関係についても言える。また、（ア）（キ）、ＡＢン型の（エ）、ＡＢリ型の（オ）は、互いに類義語で、（イ）と（キ）も類義語の関係にある。（ア）（イ）（エ）（オ）（カ）（キ）は、同一語基と見てよさそうである。

ＡＢＡＢ型の（ク）は心情を表現しており、これらとは意味に隔たりがあるように見える。だが、「浅野編辞典」でも「天沼編辞典」でも（ク）の表す状態を、（カ）（キ）の「整然とした状態が崩れるようす」を精神面に当て嵌めた状態と見做している。これに従えば、（ク）の語基もまた、（ア）（イ）（エ）（オ）（カ）（キ）と同一語基である事になる。

後に残ったＡＢン型の（ウ）とＡＢＡＢ型の（ケ）は、上述の語の意味転化とは考えにくい。（ウ）（ケ）いずれも擬音語であるが、用いられる状況は（ア）（イ）（エ）（オ）（カ）（キ）と異なっている。また（ウ）（ケ）相互にも相違がある。（ウ）（ケ）それぞれ用いられる状況はかなり限定されており、そのためそれぞれの用例において、「くしゃくしゃ」と「くしゃん」とを交換すると文意が通らなくなる。（ウ）と（ケ）は互いに同音異義の語基とするのが妥当であろう。

語基「クシャ」の場合、語形の上では一つであるが、意味上は次の三種に分類することができる。

1　くしゃみを表す…（ウ）

2　口の中で何か続けて言う様子…（ケ）

3　整然とした状態が崩れる様子…（ア）（イ）（エ）（オ）（カ）（キ）（ク）

そして、1と2はⅠ(a)に属する語基、3はⅠ(b)に属する語基ということになる。

このような手順で分類したⅠ(a)・Ⅰ(b)の語基のうち、擬音語語基（「クシャ」の場合、1と2が擬音語である）を取

り上げて、検討を進めていくことにする。

ところで、Ⅰ(b)については、意味転化による意味を必ずしも複数語型がもっているとは限らないので、そうした意味をどう扱うかが問題になる。ここでは便宜上、二つ以上の語型がもっている意味をカウントしている（本論では対象外であるが、先に例示した「クシャ」の場合、ＡＢＡＢ型でのみ認められる擬態語の意味(ク)は、Ⅰ(b)語基の意味には含まれないことになる）。

こうして整理したⅠ(a)・Ⅰ(b)語基における擬音語の語種の内訳は、次の通りである。

①人の声
②人の体内・口腔内で鳴る音
③虫・鳥の発する音
④楽器など鳴り物の音
⑤衝撃音…当たる音・弾ける音・跳ねる音・倒れる音・潰れる音（下位分類として固体―固体間の衝撃音・固体―液体間の衝撃音とに分類した）
⑥摩擦音…滑る音・擦る音・掻く音・削る音・切る音
⑦軋む音
⑧撓む音
⑨裂ける音・破れる音
⑩転がる音
⑪付く音
⑫剝がす音
⑬飛ぶ音…空気中を移動する音
⑭落ちる音…空気中を落下する音
⑮流れる音…液体の動く音・浮く音・沈む音・沸く音（下位分類として液体のみの流れる音・液体中を固体が流れる音・液体中を気体が流れる音とに分類した）
⑯震動音…震える音・揺れる音
⑰騒音
⑱その他の音

Ⅰ(a)、Ⅰ(b)、Ⅱ、Ⅲ各タイプの擬音語語基をそれぞれこれらの項目によって分類してみると、以下のようになる[11]（該当する語基がない項目については省略した）。

Ⅰ(a)
①人の声　ウフ　クツ　ケタ　ゲタ　ケラ　ゲラ　コロ
②人の体内・口腔内で鳴る音　クシャ1　クシャ2　クス　グス　ゲロ　コク　ゴニョ（コリ）（ゴリ）

ゴロ　シク　ドキ　フガ　ブツ　ベチャ　ペチャ
ポソ　ムシャ　モグ　モゴ　モソ

③虫・鳥の発する音　ガチャ　ケロ　コロ　ゴロ　ヒヨ
ピヨ　ホロ（シュル2）

④楽器など鳴り物の音　ジャカ　ドロ　ポク　ボロ

⑤衝撃音…当たる音・弾ける音・跳ねる音・倒れる音・
潰れる音
固―固　スト　チャカ1　チャリ　ドカ1　ドカ2
ドシャ　ドデ　ハタ2　バラ　ベシャ　ボカ
固―液（ジャボ）（ダブ）（バラ）グシャ

⑥摩擦音…滑る音・擦る音・掻く音・削る音・切る音
ゴシ　コリ　ゴリ　サヤ2　ザラ　サワ1　ザワ1
シュル2　ジョキ　ジョリ　チャキ　フツ1　ボリ
ポリ

⑦軋む音　キリ　ギリ　ミリ

⑧撓む音　ペカ

⑨裂ける音・破れる音　ベリ

⑪付く音　ベタ

⑫剝がす音（ベリ）

⑬飛ぶ音…空気中を移動する音
シュル1　ヒュル

⑭落ちる音…空気中を落下する音
（スト）

⑮流れる音…気体の動く音・浮く音・沈む音・沸く音
液　グツ　コト2　ゴト2　サヤ1　サラ1　ジャ
ボ　ダブ　チョロ　トク　ドク　フツ2
液―固（ジャボ）（ダブ）ブカ

⑯震動音…震える音・揺れる音
（サヤ1）（サワ1）（ザワ1）ソヨ　ハタ1
バタ1　パタ1　ユサ

⑰騒音
コソ　ザワ2　ドヤ（ドカ1）

⑱その他の音
カシャ2　ジリ　ズド　チャカ2

Ⅰ(b)

①人の声　クス　ボソ

②人の体内・口腔内で鳴る音　ガブ（カリ）（ガリ）
クチャ　グチャ　グビ　ゴク　ゴホ（シャリ）
（ジャリ）ツル　パク　パリ

④楽器など鳴り物の音　チリ

⑤衝撃音…当たる音・弾ける音・跳ねる音・倒れる音・
潰れる音

固―固　カク　カサ　ガサ　カシャ1　ガシャ　カタ
ガタ　カチ　ガチ　カチャ　ガチャ　カラ
ガラ　カリ　ガリ　ゴソ　コチ　ゴチ　コツ
ゴツ　コト1　ゴト1　ジャラ　シャリ　ジ
ャリ　ズシ（ズバ）チャラ　チリ　ドカ3
ドサ　ドシ　ドス　ドタ　ドテ　パカ　バキ
パキ　バシ　バタ2　パタ2　パチ　パラ
バリ　パリ　ビシ　ピシ　ブス　プス　ブツ
1　ペシャ　ポカ　ボキ　ポキ

固―液（ガボ）（ゴボ）（ザブ）ズブ　チャポ　ド
ブ　ドボ　ビシャ　ピシャ　ビチョ（ベチ
ヤ）（ペチャ）ボシャ　ボタ　ポタ　ポチ
ャ　ボツ　ポツ　ボト　ポト

⑥摩擦音…滑る音・擦る音・掻く音・削る音・切る音
ギコ（キシ）（ギシ）（ギチ）サク　ザク　サラ2
ズバ　スパ　ゾリ　チョキ　ツル

⑦軋む音　キシ　ギシ　ギチ　ミシ（メリ）

⑧撓む音　ペコ

⑨裂ける音・破れる音　ビリ　ピリ　メリ

⑩転がる音　ゴロ

⑮流れる音…気体の動く音・浮く音・沈む音・沸く音
液　ガボ　ゴボ　ザブ　ジャブ　ブツ2

液―固（ジャブ）（ザブ）

液―気（ガポ）（ゴボ）ブク　プク

⑯震動音…震える音・揺れる音
ガク（ガタ）（ガバ）（ズシ）バサ　パサ　ブル

Ⅱ

⑱その他の音　ギト

Ⅲ

⑤衝撃音

固―固　ガタ　カツ　ガツ　バタ2　パタ2

固―液　ボチャ

⑪付く音　ペタ

（　）を付した語は、意味が分類項目の二種類以上に跨がる語である。より妥当と見做した分類項目では、（　）を付さずに分類している。

まとまった語基の例が得られるⅠ(a)Ⅰ(b)の、意味別の語基数と、それぞれの総数に占める割合を示すと、表2のようになる。

（　）で囲んだ語基を数字から外すと、Ⅰ(a)の総語基数は95である。①～⑱に分類した意味項目での語基数の平均

表2

	Ⅰ（a）				Ⅰ（b）			
	語基数	割合(%)	のべ	割合(%)	語基数	割合(%)	のべ	割合(%)
人の声	7	7.37	7	6.42	2	1.83	2	1.54
体内音	19	20.00	21	19.27	9	8.26	13	10.00
虫・鳥	7	7.37	8	7.34	0	0	0	0
楽　器	4	4.21	4	3.67	1	0.92	1	0.77
衝撃音	12	12.63	15	13.76	68	62.38	74	56.92
固―固	11	11.58	11	10.09	53	48.62	54	41.54
固―液	1	1.05	4	3.67	15	13.76	20	15.38
摩擦音	14	14.74	14	12.84	9	8.26	12	9.23
軋み音	3	3.16	3	2.75	4	3.67	5	3.85
撓む音	1	1.05	1	0.92	1	0.92	1	0.77
裂ける音	1	1.05	1	0.92	3	2.75	3	2.31
転がる音	0	0	0	0	1	0.92	1	0.77
付く音	1	1.05	1	0.92	0	0	0	0
剝がす音	0	0	1	0.92	0	0	0	0
飛ぶ音	2	2.11	2	1.83	0	0	0	0
落ちる音	0	0	1	0.92	0	0	0	0
流れる音	12	12.63	14	12.84	7	6.42	11	8.46
液	11	11.58	11	10.09	5	4.59	5	3.85
液―固	1	1.05	3	2.75	0	0	2	1.54
液―気	0	0	0	0	2	1.83	4	3.07
震動音	5	5.26	8	7.34	4	3.67	7	5.38
騒　音	3	3.16	4	3.67	0	0	0	0
その他	4	4.21	4	3.67	0	0	0	0
計	95	100.00	109	100.00	109	100.00	130	100.00
平均	5.2778		6.0556		6.0556		7.2222	
標準偏差	5.3935		5.9672		15.3169		16.7682	

値はおよそ5.28，標準偏差は、小数点以下三位まで記すと5.394（小数点以下第四位を四捨五入）である。Ⅰ(b)の総語基数は99，平均語基数はおよそ6.06，標準偏差は、小数点以下三位までで15.317である。数値の偏りを見ると、Ⅰ(b)のばらつきが大きく、衝撃音を表す擬音語語基数が68，Ⅰ(b)語基の62.38％を占め、際だって多い。

一方、Ⅰ(a)には、Ⅰ(b)ほどの偏りは見られない。摩擦音・流れる音がやや多く、体内音に分類した語基が、割合としては20.00％と最も多い。

ところで、擬音語は「写声語」「写音語」に分類されることがある。山口仲美氏によれば、「写声語」は現実世界に生起する声を写したことばであり、

「写音語」は現実世界に起こる種々の物音を写すことばである。[12] この定義に従えば、「①人の声」と「③虫・鳥の声」は、写声語ということになろう。写声語が特殊な語音構造を持つことを、山口氏は指摘されているが、Ⅰ(a)語基における「①人の声」「③虫・鳥の声」を表す語の語基数が、Ⅰ(b)より多いのは、それと軌を一にする結果であると推察できる。語基が複数の語型に対応しないということは、擬音語擬態語においてパターン化した強調音を受け付けないということである。

Ⅰ(a)の擬音語語基では、いわゆる「写声語」よりも、「②体内音」に分類した語の方が統計的に多いことになる。そして、さらに詳しく見てみると、Ⅰ(a)とⅠ(b)とでは「②体内音」に属する語基の担う意味に違いがある。即ち、Ⅰ(a)では咀嚼音・嚥下音の他に、「ゴニョ」「モゴ」のような不明瞭な話(声)が含まれているのに対し、Ⅰ(b)では咳を表す「ゴホ」を除けば、すべて咀嚼音・嚥下音である。Ⅰ(a)の「体内音」には、写声語とも写音語とも見做せる音が含まれている。語型対応という点から見れば、要するに、人の声・虫の音などある特定の生物の声を写す語は、語基が語型対応しにくいのである。

しかしながら、これは「声」に限らず、ある個別的なものが発する音を写す語の語基は、語型対応しにくい傾向がある。ここでいう「ある個別的なものが発する音」とは、「〈何〉が〈どうする〉音」という構造を考えた際に、〈何〉の部分に、「〈金属などの固いもの〉が」「〈液体〉が」等ではなく、「〈ベル〉が」「〈人の声〉が」等が入るという程度差の問題ではあるが、両者の間には特定不特定のレベルの差があると見ることができよう。Ⅰ(a)の「④楽器など鳴り物の音」「⑱その他の音」に属する「ドロ」（太鼓の音）や「ズド」（鉄砲の音）などがこれにあたる。写す音響の対象が個別的になると、複数の強調音を許容しないというのは、裏返せば、構成された語形がまさしく個別的なものを指示しているということである。

四

以上、擬音語について、語基の付加型語型への対応のあり方という観点から検討を加えた。語基の語型への対応のあり方という分類自体、殊に内省の利く現代語において、個人的な揺れが生じることは否定できない。とはいえ、辞典を手がかりに分類を行なうと、複数の語型に対応しない語基を有する擬音語には、従来言われている写声語と一致するものが、ややまとまって存在する。より詳しく個々の

語を検討してみると、写声語写音語いずれかには判断し難い語が混在している。これら擬音語の下位分類については、そもそも写された対象が普遍的に声といえるかという問題もある。

一方、複数の語型に対応して類似の意味を有する語とそうでない語とには、表現対象の個別性に差のある場合が少なからずあることを確認できる。その個別性のレベル差も連続的なもので線引きは困難であるが、語音で写された音（声）から、その生物の種類を指示するという有り様は、表現対象の個別性という点からは最たるものということになる。

註

① 「音象徴語の二音節語基と意味―語型との関わりから―」（『文藝論叢』四一号）。

② 岩波日本古典文学大系『古事記　祝詞』二五三ページ。

③ 岩波日本古典文学大系『万葉集』。

④ 森田雅子氏「語音結合の型より見た擬音語・擬容語―その歴史的推移について―」（『国語と国文学』三〇巻一号　昭和二八）、阪倉篤義氏『語構成の研究』三一一～三一九ページ。

⑤ 「体言」（『岩波講座日本語6』　昭和五一）。

⑥ 先に挙げた「可和羅」などが明らかに音を写していることと矛盾するようであるが、上代においては、擬音語擬態語と一般語彙との差が、中古よりも小さかったと考えられている。山口仲美氏「平安時代の象徴詩―性格とその変遷過程―」（共立女子大短期大学部・文科『紀要』一四　昭和四六。後に『平安文学の文体の研究』　明治書院　昭和五九　所収）。

⑦ 「象徴辞と自立語―音と意味―」（『国語国文』二一巻八号　昭和二七）。

⑧ 『邦訳日葡辞書』（土井忠生・森田武・長南実編訳　岩波書店　昭和五五）では、「Soccon yori mōsu（息根より申す）心の底から信実をもって話す。」と記されており、本来「ぞっこん」は一般語彙であったと推測できる。

⑨ 佐久間鼎氏「音響心理学」（『国語科学講座―Ⅱ―音声学』明治書院　昭和一〇）二五頁に、「打ち鳴らされた音は、破音を以てはじめ、『ン』を以て終るものを常とする」とある。

⑩ 一つの感覚器官が刺激を受けた際、別の感覚器官が影響を受けて、その感覚器官に対応する刺激を受けているように感じる現象。例えば、音を聞いて色を感じたりすること。

⑪ 分類上、同音異義と見做したのは次の語基である（「クシャ」を除く）。参考のため、語型に対応した際の意味を併せて掲げる。

カシャ1　硬質で小さい物などが触れ合ったときに発する澄んだ音（日国）

カシャ2　シャッターの落ちる音（天・浅）

コト1　固い物が軽く打ち当たって出す音（浅）

コト2　物を煮込んでいる時の音(浅)
ゴト1　重い大きい物が、落ちたり、ぶつかったりしてたてる音(日国)
ゴト2　物の煮える音を表す(日国)
サヤ1　浅い小さな川を流れる水の音(天)
サヤ2　薄い軽い物どうし、また、それが他の物と軽くすれ合ったときなどに出る音(天)
サラ1　浅い水が軽やかに流れる音(浅)
サラ2　粘り気がなく、細かいもの、細いもの、薄いものが集まって軽く触れ合う音(浅)
ザワ1　多くの草・木の葉・茎などが触れ合う時や、水面に波が立ち騒ぐ時などに出る音(天)
ザワ2　おおぜいの人々の話し声、動きの物音(天)
シュル1　物が高速に飛んでいく時などに、空気との摩擦によって出る音(天)
シュル2　滑らかに滑るように、物事が進行・移動・運動などする様子(天)
　＊例　しゅるしゅると姿を見せたのはへび(天)
チャカ1　「小型の機械が作動(浅)」する音
チャカ2　金属がぶつかったりして出す、軽快な音(浅)
ドカ1　主として大勢の者が、荒々しい足音をたてて、無遠慮に出入りしたり動きまわったりするさまを表わす語(日国)
ドカ2　発砲などの発射音、一般に爆発する音や、その様子を表わす語(日国)
ドカ3　重い物が落ちて物に当たるさま(日国)
ハタ1　広げた布や翼などが大きく風を受けて立てる音(浅)
ハタ2　物の落ちる軽い音、軽く打ち合わされる音(日国)
バタ1　「布、板状のものが風にはためいたり(浅)」する音
バタ2　〔布、板状のものが〕打ち当たったりする音(浅)
パタ1　「薄く軽い物が風にはためいたり(浅)」する音
パタ2　〔薄く軽い物が〕打ち当たったりする音(浅)
フツ1　細いもの、連続するものが急に、完全に切れるさま、またその音を表わす(日国)
フツ2　静かに煮立っている状態(浅)
ブツ1　かなり厚みや張りのあるものを、突いたり、断ち切ったりする音(浅)
ブツ2　水分の少ない状態で、煮立ったり沸き立ったりして出す音(浅)

⑫　山口仲美氏「写声語の一性格」(『松村明古稀記念　国語研究論集』　昭和六一)に依る。

（本学助手　国語学）